



號六第 卷拾第

時 言

現在を重視せよ

(1) 近來古書畫骨董品類の價格の暴騰せるは、實に驚くべきものあり。由緒傳來の稍著しきもの、一たび市場に出づれば忽ち數千圓乃至數萬圓の代價を以て賣買せられつゝあり、思ふに是れ一に藝術隆興の氣運に伴ひ、一般に古美術品尊重の念を加へたると、一面には經濟界の情勢漸次變動して、所謂富豪の間に新陳代謝行はれ、新富豪は其價格を高むるの手段として將又新邸宅を裝飾するの資料として古美術骨董品を購入するの風行はれ、隨ふて其需要は益々増加するに、元來古美術品は其數限りあるを以て、自ら價格の騰貴を來せるが、骨董商等は此機會に乗じて、種々の手段を運らして、價格の釣り上げを計りつゝあるなり、乃ち知る、近來古美術品價格の暴騰は決して單にそが美術上又は歴史上の眞價値に依れのみならず、多

くは富豪の虛榮心を利用して、骨董商等のせり出したる作り値段に過ぎず。

人或は歐米に於ける古美術品の高價なるを以てして、之に比すれば我古美術品の尙ほ遙に低廉なるを説くものあり。然れども吾人は歐米に於ける古美術品價格の暴騰に對しても、甚だニガクしき事多しと思へり。見よ幾多の名匠は常に貧苦に堪へ、殆ど饑渴と戦ひつゝ終生を斯道に獻じたるも、其生前は其勞に酬ゆるなくして、一旦其計を聞き、俄に其作品の價格を騰貴する例は決して珍しきことにあらざるにあらずや。

要するに回顧的傾向は何れの國の美術界に於ても存在し、獨り我國のみが然るにはあらず、然れども徒に過去を回顧して現在を蔑視するは僻事なり、苟も藝術の健全なる發達を希望するものは、徒らに過去を偏重して現在を無視するが如きことあるべからず。况んや我國は長き歴史を有し、古美術品に富みたるを以て、勢ひ新美術品の需用を妨げ、新進作家は古美術品の爲めに壓倒せらるゝの觀なきにあらず。是れ矯正せざるべからず。勿論現今に於ても馳名の大家中其作品の價格遙に古美術品を凌駕するものなきにあらざるも、斯の如きは寧ろ少數に過ぎず。

乃ち吾人は警めて曰ふ、回顧に耽るなかれ、現在を重んぜよ、有望なる新進作家を愛護せよ。是れ實に將來の發展を企圖する所以なり、新進の作家にして、能く其作品が正當に購買せられ、其生計の基礎確立することを得るに至らざれば、曷んぞ堅實なる生活を營み眞摯なる研究を積むことを

得んや。

それに就ては、新進作家の爲めに其作品を希望者に紹介し、之を賣捌くの途を講ずること目下の急務なり、其途未だ立たざるが爲めに、美術家は今や自ら賣捌の衝に當らざるを得ず、即ち一面製造人にして一面商人を兼ねるの狀態に在り、之を以て社交の爲めに時間と金錢を浪費し、隨て生活を飾り衣服を美にする等俗事に腐心奔走し、復た安心して専ら心力を製作に傾注すること能はず、眞摯なる氣風を消耗し去るの弊なきとせず。

之を歐洲の例に見るに、初は美術商が作家と華客との中間に立ちて周旋したりしが、後ち商人が暴利を貪るの弊を生ずるに及んで、此風廢せられ、作家が直接商賣を爲すの已むを得ざるに至れり。是れ一種の變態に屬するを以て、早晚改良の要あるは論を俟たず。

從來日本畫家の間には、師友又は知人の後援に依りて畫會を組織すること行はる。其他展覽會を以て一種の販賣機關となせるものもあれども、元來展覽會は、其性質に於て展覽鑒賞を主なる目的となせるものにして、販賣に就ては、寧ろ放任的なるべきが故に、作家に取りては餘り當てにならぬものと謂はざるべからず。

依て思ふに新進作家の爲めには、別に進んで其作畫を賣るの方法を講究し、安んじて其製作に親しむとを得せしむるの必要あり。然らば其方法如何、蓋し畫家が相協同して一種のシンデケートを組織して販賣機關を設くるか、又は信用すべき個人に托して之を販賣せしむるを得策とすべし。近

時琅玕洞主人が正宗得三郎氏の爲めに一種の畫會を組織したるが如きは、頗る吾人の意を得たるものにして、此種の企の續々起らんことを希望す。

吾人は古物獨り跋扈して新作殆ど顧慮せられざる今日の現況を遺憾とし、社會の注意と同情とを以て、新作品に向はしむるの必要を痛切に感ずるが故に、茲に此言を爲す、然らざれば作家をして堅實なる生活の基礎を立て、眞摯なる研究に専らならしむること能はざるを恐ればなり。

序ながら、吾人は古美術骨董を蒐集する富豪に望む、卿等が奸商等の奸策に乗せられて、無意味に投じ去る數萬千金を活用し、鑒識あり品格ある美術家を顧問とし、廣く新進の佳品傑作を購入せば、實に我藝術家を奨勵し、藝術界を利するところ、極めて多からん。

さばれ、社會を動かさし、其注意と同情とを惹かんと欲せば、矢張り先づ美術家の側より働き掛くるの必要あるを以て、美術家は進んで健全なる良法を案出して、自ら其進路を開拓せんことを務むるを可なりとす。

白馬會の解散

吾人は白馬會の解散を以て、我明治藝術史上に於て、特筆すべき事項と見る。そは同會が去る二十九年創立以來我藝術界の發展に關して貢獻するところ尠からざりしが、今又時勢の推移に鑑み、斷然之を解散し、進んでは黨派的私心を棄て、公明正大に我藝術界全般の進歩の爲めに致し、退て

は技術の研究、製作上個人の特徴を發揮せんとすは、洵に適當の處置なりと信するを以てなり。

黒田清輝氏は解散の理由を語つて曰く

『現今會員中の者には大分拔群の技術を有する者も出來思想の變遷も累ねたので私共が當初期した事も着々有終の美果を收めた様である譬へば我々は油畫とは何處なる者であるかと云ふ事を知しめる時代に起り畫家とは斯う云ふ者で展覽會は斯う云ふ風にして開く者と烏滸がましいが其等の標準を示す爲めに主義主張を以て此團體を續けて來た所が二三年以來私共の希望して來た公設展覽會も設立され私共の會員の大多數は外國で學で來た人々となり今は彼標準を示す必要も無くなつた加之世間の人に油繪が好く解得され同時に鑑識力も一般に進めば製作品を見せる場所も立派に出來上つて居るれば此時に當つて各畫家の特長を示すには團體よりも個人的にする方が適當ではあるまいか元來畫家は個人の利益とか名譽とかは不問にして只管美術と云ふものに向つて一身を捧ぐ可きものであるが團體は兎角誤認され易いものであるから終りは後進を誤り自分を誤る結果を生じほすまいか氣遣れる又私共が明るい時勢に適合した畫を作らねばならぬと云ふ主義は今では畫界の風潮となつて居て最早團體的研究を俟たないので白馬會が特に繼續して仕事を必要はないのである故に爾來からは各志の赴く所に從つて驥足を伸す時代ではあるまいかと云ふのが今回解散するに至つた理由である』(國民)

同會創立者の一人にして、約十年前に退會したる岩村透男は局外者として其所感を述べて曰く

『白馬會創立當時の日本洋畫界は固より一般美術界の形勢は今日の狀態とは遙に異つておた。新歸朝の畫家が當時の狀態を嫌らなく思ひ何等かの新運動を起さんと同志の者協議團結した之れが創立の直接原因である。然し當時の美術界に對する不満足と見るのは非常に狭い解釋で其の實は明治美術界引いては社會全體の有様に不満足で有つたのだ。今日では美術が非常に社會一般から重ぜられ新聞雜誌上美術に關する記事を見ない事はない位であるが、創立當時の狀態は實にみぢなものだ新聞雜誌に其等の記事の現れる事は極て稀であつた。當時の新歸朝者は西洋の生活と美術の親しい關係を直接眼にして來たのであるから我國に於ても如何にしてか美術を重要視させたい、生活問題の上に重く見させたいと言ふ望を抱たと云ふ切な要求に驅られた

のだ。洋畫の眞面目な研究と當時存在した團體事業の仕方、言はば展覽會に對する不満足も原因であつたに相違ない、當時の展覽會と云へば極めて不整頓なものであつたが陳列法を改善したり佛國あたりの展覽會にあるが如き目錄を作つたり、從來の勸工場風の陳列を改めて美術品を樂しむ場所として設計しようとする企て等は我國では白馬會が先鞭をつけた事業である。十五年前には斯かる有様であつたのが其後漸々發展して種々の美術團體も増して來るに四年前からは政府の事業として美術展覽會が催されると云ふ状態になり、從つて社會よりは重視され日の問題となるに至つたのは獨り白馬會のみの力でなく一般の進歩の致す所であるが公平な眼で見れば確に白馬會が全體の運動に參與する所の少くなかつたと言ふ事は斷言して憚らない。

斯く今日の洋畫界、のみならず全體の美術界の有様が創立當時の事情と異り、當時の人々が理想としておた所は多くの點に於て成就し、一段落着いたと言ふ形で之からは技術の研究、製作と云ふ事が益々個人的ならざるを得ないと同時に區々たる黨派の團結を旨とせず大局面から打算して運動せねばならぬと云ふ時代になつてゐる、斯る點に於て白馬會の人々が時勢を洞觀し解散と決したのは非常に時を得た事であり結構な事であると思ふ兎も角白馬會の事業は熱して落ちる時が來たのだ、目的は殆ど貫徹せられたのだ(讀友)

吾人は眞面目に且つ公平に、同會の成せる事業と今回の解散に關して考慮して、全然兩氏の説に同感を表するを以て、特に此に之を掲げて敢て多くを言はず。

唯だ吾人は飽くまでも、藝術界に黨派的私心の存在することを厭ふが故に、藝術上の競争は何處までも一騎打たるべきを信するが故に、將た又た眞の藝術品は、競争や努力の結果のみならずして、作家の感興の所望なることを信するが故に、近來一種の黨派の如く見做されつゝありし白馬會の解散を喜び、同時に同會の解散を促すに至りし時勢の進歩を賀することを言添へざるを得ず。